HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Visual Search and Concealment Strategies in the Spatiotemporal and the Temporal Domains across Social Contexts [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	伊藤, 資浩
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13842号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78697
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Motohiro_Ito_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：伊　藤　資　浩

	主査	准教授	河原純一郎
審査委員	副査	教授	安達真由美
	副査	教授	大沼進

学位論文題名

Visual Search and Concealment Strategies
in the Spatiotemporal and the Temporal Domains across Social Contexts
（時空間・時間次元における社会的文脈に基づく視覚探索及び隠蔽方略）

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の学術的意義は次の通りである。第一に，以前は空間次元での探索が中心であった注意研究の領域に時間軸を新たに導入し，時空間的な探索と隠蔽の方略を調べた点である。認知心理学の中心的話題の一つである選択的注意を調べるための手法としての視覚研究は，主に探索行動に焦点が当てられてきた。一方で隠蔽行動も重要である。具体例として，トランプゲームのばば抜きの終盤で，残った 4 枚の手札を相手が 1 枚ずつ示していったとする。この場面で，真剣勝負の相手はジョーカーを何枚目のカードとして出すだろうか。あるいは，自分が同様にする場合，何枚目にジョーカーを含ませるだろうか。このように，本論文は，時間的に起こる複数のイベントの中に潜む標的を見つける，あるいは標的を隠すならば何番目にするかという行動に着目した。これまでに動物における貯食行動研究は存在する。人間では，子どもの探索・隠蔽方略に関する研究がかつて散発的に見られたが，成人対象の研究はようやく始まったばかりである。時間軸方向での検討は本論文が世界初の試みであり，順番に起こるイベントの中で，どこを探すか，どこに隠すかの方略を検証するという，未開の領域を開拓した。

第二に，新たな側面を調べるために，本論文では測定手法も新しく開発した。実験では被験者はカードが 1 枚ずつ呈示される動画を観察した。そして，探索課題では，相手がそのようにカードを見せてきたとき，当たりは何枚目のカードだったと思うかを被験者は推測して回答した。隠蔽課題では，その動画のように相手にカードを見せるならば，あたりを何枚目にすればよいかを推測させた。

本論文に含まれる7つの実験では，計280名におよぶ被験者から行動反応を測定した。その結果，どこを探すか，どこに隠すかという点に関して，5 つの特性を見出した。まず，第一の特性は，探す・隠す対象の中に特徴的な異物があるときは，その異物が鍵を握ることである。隠そうとするときはその異物を避けて隠しやすかった。これは空間的特性を用いた先行研究でも確認されていたことだが，本論文の時間的探索・隠蔽文脈でも，同じ特性が見られた。

残りの 4 つの特性は従来の空間探索では生じない新たな発見であった。第二の特性は候補へのアクセスのしやすさであった。この実験ではカードが順に積まれ，下に積まれたカードはアクセスしにくいので，隠す際に選ばれやすい。上に積まれたカードはその逆で，わざと見つけて貰いたいときに選ばれやすい。本論文の著者は積み上げる方向を逆にする(後から見せるカードを下に差し込んでゆく)ことを思いつき，実際に実験 4 では見事に結果の傾向が逆転した。単純な実験操作で真逆の結果を示すことは実験心理学者の憧れであるが，本論文の著者はあざやかにそれを見せつけ，審査委員会を魅了した。第三は時間的な遠さ，第四，第五には短期記憶の初頭効果・新近効果を反映する成分と無作為選択の方略が特定された。順番に見せた 4 枚のカードの中に当たりを隠すという，一見して無作為に起こりそうな選択事態であっても，カードの見せ方や目立たせ方で体系的に選択行動が変容した。

本論文はその基にあるルールを発見するための明快な手法を考案し，鮮やかに特定した。7 つもの実験がありながら，互いに比較できるわかりやすい実験デザインを構築し，地道な測定を積み

上げた結果が本論文として結実していたといえる。

学位授与に関する委員会の所見

本論文は，単にこれまで測定されていなかった穴場をポツンと探り当てたというわけではない。入念な先行研究のレビューと，新たな発想の考え抜かれた組み合わせから成り立っている。とくに，絶妙な要因配置と工夫された実験手続きを用いながら，着実に議論を構築してゆく姿勢は，いずれの審査委員も高く評価していた。本論文を構成する研究は日本心理学会などで 2 つの優秀発表賞と 1 つの論文賞を受賞していることからも，文字通り立派な成果であるといえる。分析手法として，本論文は従来の研究に基づいた手続きに則っていたが，他の視点からの解析がありうるという点が審査委員から指摘されていた。そうした部分もありながら，本論文で開発された手続きには発展性があることは，審査委員会も強く認めるところである。新たな実験アイデアがいくつもすぐに発想できることから，本論文のオリジナリティの高さが伺える。たとえば，本論文の手法は, 購買場面における商品の提示順序などの日常事態での探索・隠蔽行動に関わりが深い。総合考察はこうした行動の理解に貢献しうる可能性を含めて展開されており，他分野にまたがる今後の研究展開が大いに期待できる。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。(1982 字)